

学外実習における学生の現状について —栄養士教育における「校外実習」のあり方を探る—

矢島麻由美・児玉ひろみ

(2007年11月8日受理)

要 約

多様化する栄養士業務と近年とみに変化しつつある学生資質との間で、より良い「学外実習」の実施をめざし、現行の「校外実習」の現状分析を行うために調査を実施した。

その結果、実習前に学生の半数以上が漠然とした不安を抱いていることがわかった。その不安の内容とその他の事象についても、実習前と実習後の調査結果を比較検討することにより様々なことが明らかになってきた。事前の情報不足から栄養士・栄養士業務・施設に対しての不安が先行するが、実習後には施設への好印象と自分の準備不足を感じる学生が多かった。これらのことから校外実習を充実させる大きな要素が、事前指導の充実にあることがわかった。今後の校外実習に対しては授業確保の模索の必要性を感じている。

キーワード 栄養士教育、 校外実習、 栄養士養成施設、カリキュラム改正、管理栄養士

はじめに

ここ何年間の栄養士・管理栄養士を取り巻く行政の変化には、実に驚くものがある。

平成12年4月の栄養士法¹⁾の一部改正から始まり、平成14年栄養士・管理栄養士養成施設におけるカリキュラムの改定²⁾、平成15年健康増進法施行、平成16年栄養教諭制度創設、平成17年食育基本法施行、介護施設における栄養ケア・マネジメントの導入、平成18診療報酬改定による入院栄養管理実施加算の導入。その間を縫うようにして、平成13年中央省庁の再編による厚生省と労働省の合併、平成16年日本人の食事摂取基準(2005年版)公表、平成17年食事バランスガイドの公表があった。そしてさらに平成20年4月からは特定健診・特定保健指導がスタートする。

これら一連の激しい動きから、養成施設に携わるものとしては、行政の目指す方向性をいち早く察知し、今後どのように備え対処して行くべきかを考えながら、カリキュ

ラム・授業内容を検討して行かなければならない。

これらの激しい動きの背景には、「健康づくり政策」を国の最優先課題として位置付ける行政側の「環境整備」の急務が感じられる。そしてその一環として栄養士・管理栄養士活用の強い推進力を感じるのである。

しかしこのような動きはあるものの、そのわりに、どのような栄養士・管理栄養士を育てて行ったらよいのかというビジョンが今ひとつ明確に伝わってこない。

特に栄養士に関しては伝わってこないため、準管理栄養士を育てているという感覚で今に至っている。

このような中で、日本栄養士会は「栄養士制度検討委員会」を立ち上げ、平成19年5月に「栄養士制度改革に向けた施策の基本方針」³⁾としてまとめ発表した。

「管理栄養師制度への一本化(栄養士法→栄養師法)」という提案が、今後どのような幅広い議論を経てどのように形成されて行くのかが注目される。内容の善し悪しは別としても、資格・制度・方向性・将来のビジョンを含めての問題提議をしたこと自体は評価したいと思う。

「どんな難題かを分かっているが、あえてこの問題を提議しています。なぜなら、そうしなければ(栄養士・管理栄養士の世界が)何も変わらないからです。」と言っていた日本栄養士会・理事の方の言葉が印象的であった。

この論議を経て、将来的に資格としての栄養士はなくなり管理栄養士(管理栄養師)のみの一本化となるのか、あるいは 栄養士+他の専門資格 となるのか、または全く別の資格となるのか、未だ定かではないが見極めなければならない。それによって栄養士養成校の将来が決まってくるからである。廃校する施設もあると思われるが、必然的に養成のための教育・カリキュラム・校外実習等の内容を変更させる施設も増えることになろうと思われる。

現在、学外実習は、平成14年4月文部科学省・厚生労働省より通知された「管理栄養士養成施設における臨地実習および栄養士養成施設における校外実習要領」⁴⁾⁵⁾に従って実施されている。これによって、それまでばらつきのあった各実習施設の教育プログラムの格差と、養成校による校外実習の取り組み方法や内容の格差が、ある程度是正されたものと考えられる。しかし基本の標準化は図れたものの、施設の指導者の資質・考え方、そして養成施設の指導者の取り組む姿勢や位置づけなどによって、相変わらず実習の格差が生じていることは否定できない。栄養士の資質の向上という意味合いにおいては、依然として数多くの問題点を抱えているといえる。

2 新カリキュラムになって「校外実習」は「給食管理実習」から独立した実習科目となった。専門分野の教育内容としては「給食の運営」となっているが、それまでに学んだ基礎的科目・専門的科目の全てを包括している。さらに社会人として人間としての生き方や人や組織とどう係わるかという学びも重要な修得目標となっている。つまり「校外実習」は栄養士養成教育の二年間の集大成とも位置づけられる⁶⁾。

本研究では、変化し多様化する栄養士業務と、近年とみに変化してきた学生資質の

問題との間で、より良い「学外実習」の実施をめざす為に、現在行われている「校外実習」の現状分析を行い、問題点を明らかにするために調査を実施した。

方法

1. 調査対象と調査時期

調査対象は、本学食物栄養学科の平成18年度入学生112名のうち栄養士免許取得を希望する95名とした。調査時期は、1年次後期および2年次の校外実習の前後とし、自記式の質問紙調査を実施した。

2. 調査項目

1年次は、実習希望施設および進路希望について調査した。実習希望施設は、病院、事業所、病院と事業所のどちらも、の中から一つ選択、進路希望は栄養士、栄養士以外、迷っている、の選択肢とし2年次の校外実習前後にも同様の質問をした。

2年次の校外実習前は、実習への不安と期待に関する4項目、実習内容の把握について1項目、事前学習に関する2項目、実習施設および班編成に関する3項目、アルバイトの状況の3項目、進路希望1項目の合計14項目について調査した。

2年次の校外実習後調査では、実習への期待と実際の1項目、実習での学習状況に関する3項目、実習について大変だったことに関する3項目、班員との関わりの2項目、事前学習に関する4項目、実習施設への適性についての1項目、栄養士への意識および進路希望に関する2項目、および実習生として事前学習や実習態度において大切だと思うことについて自由記述とした。

結果

1. 実習前の学生の意識について

1) 実習への不安

図1に、実習前の調査における実習への不安についての結果を示した。「実習

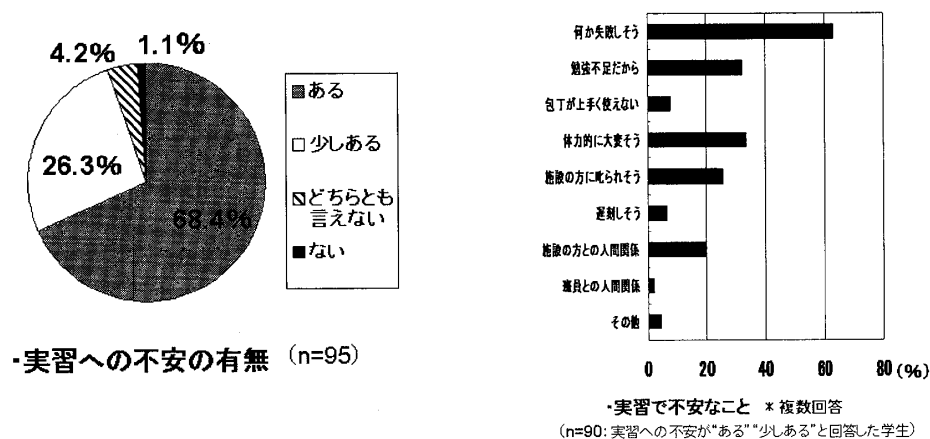


図1 実習への不安（実習前）

に不安はありますか」という質問に対して、不安が「ある」と答えたのは68.4%であり、「少しある」と答えたのは26.3%、「どちらとも言えない」は4.2%であった。不安のある学生は、合わせると94.7%に達した。不安が「ある」「少しある」と回答した学生にどのようなことが不安なのかを選択肢から選ばせた結果、一番多かった答えが「何か失敗しそう」63.3%であった。その次に「体力的に大変そう」33.3%、「勉強不足だから」32.2%が続いた。実習施設の方との係わりについての不安として、「施設の方に叱られそう」が25.6%、「施設の方との人間関係」が20.2%であった。その他に「包丁が上手く使えない」7.8%、「遅刻しそう」6.7%、「班員との人間関係」2.2%、「その他」4.4%となった。

2) 実習内容の把握

実習前に実習内容をどの程度把握しているか質問した結果(図2)、「かなり把握している」と答えたのは1.1%、「ある程度把握している」が29.5%、「少しは把握している」が44.2%であったが、「まったく把握できていない」と答えた学生が25.3%であった。

3) 班編成および実習施設の配置について

班編成については(図3)、「まったく不安がない」学生が24.2%、「あまり不安がない」36.8%、「どちらとも言えない」29.5%であった。「不安」と答えた学生は9.5%であった。実習施設の配置について(図4)、「希望どおりで満足」、「ほぼ希望どおりで満足」と答えた学生を合わせると60.0%であったが、「ほぼ希望どおりだが不満」と答えた学生が8.4%、「希望とはまったく違う」31.6%であった。

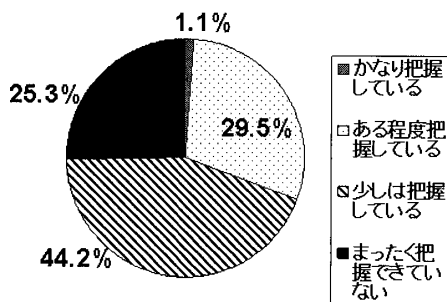


図2 実習内容の把握(実習前) (n=95)

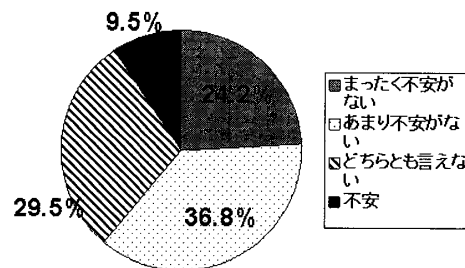


図3 班編成について(実習前)
(n=95)

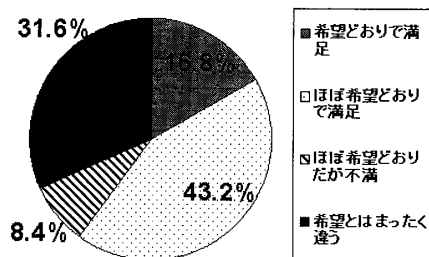


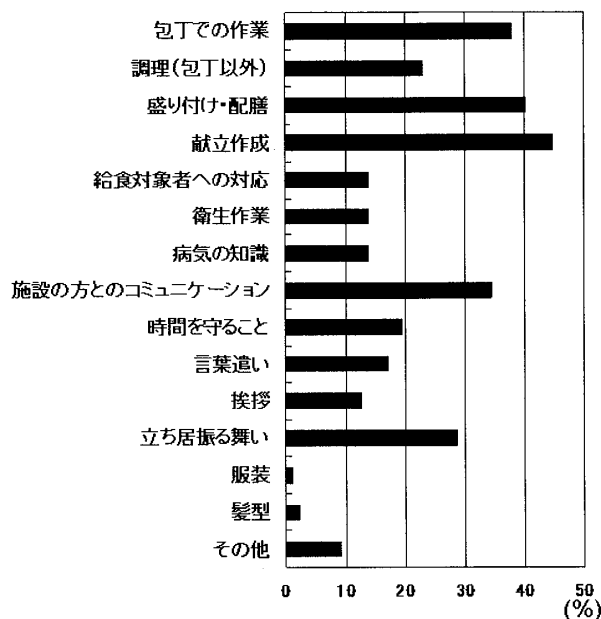
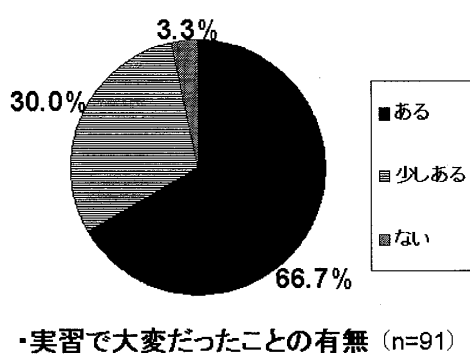
図4 実習施設の配置について(実習前)
(n=95)

2. 実習後の学生の意識について

1) 実習で大変だったことについて

図5に、実習で大変だったことについての結果を示した。実習で大変だったことが「ある」と答えた学生が最も多く66.7%、次いで「少しある」30.0%、「ない」3.3%であった。大変だったことが「ある」「少しある」と答えが学生に、どのようなことが大変だったのか質問したところ、「献立作成」44.8%、「盛り付け・配膳」40.2%、「包丁での作業」37.9%であった。次いで「施設の方とのコミュニケーション」34.5%、「立ち居振る舞い」28.7%、「調理（包丁での作業以外）」23.0%となった。その他に「時間を守ること」19.5%、「言葉遣い」17.2%、「給食対象者への対応」と「衛生作業」および「病気の知識」が各13.8%、「髪型」2.3%、「服装」1.1%であった。

また、大変だったことが「ある」「少しある」と答えが学生に、実習前の予想と比べてどのくらい大変だったのか質問したところ（図6）、「思っていた以上に大変だった」24.1%、「思っていたとおり大変だった」39.1%、「思っていたより大変ではなかった」29.9%であった。



・実習で大変だったこと * 複数回答
(n=89: 大変だったことが「ある」「少しある」と回答した学生)

図5 実習で大変だったこと(実習後)

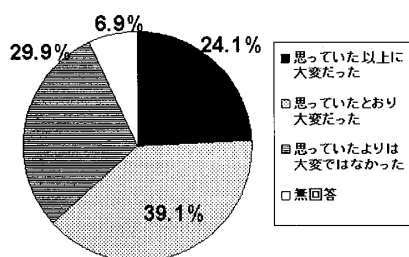


図6 実習前の予想と比べてどのくらい大変だったか(実習後)：(n=89)

2) 班編成および実習施設の配置について

図7に、実習での班員とのコミュニケーションについて質問した結果を示した。班員とのコミュニケーションが「とても良かった」と答えた学生が55.1%、「良かった」33.7%であった。「どちらとも言えない」という学生が11.2%であったが、「悪かった」「とても悪かった」という学生はいなかった。実習施設が自分に適していたか質問したところ(図8)、「とても適していた」38.5%、「ある程度適していた」38.5%、「どちらとも言えない」16.5%であったが、「適していなかった」と答えた学生も6.6%となった。

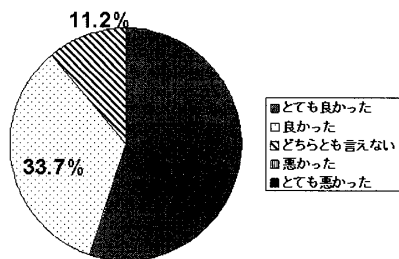


図7 班員とのコミュニケーション(実習後)
(n=91)

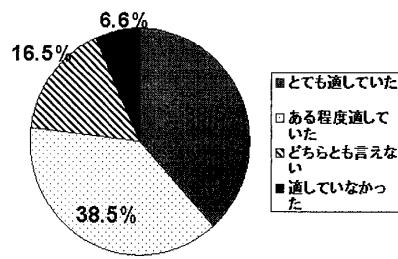
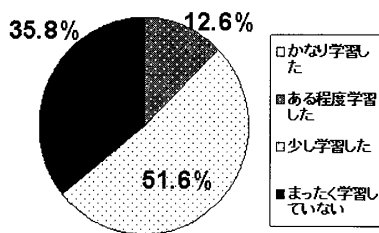


図8 実習施設は自分に適していたか(実習後)
(n=91)

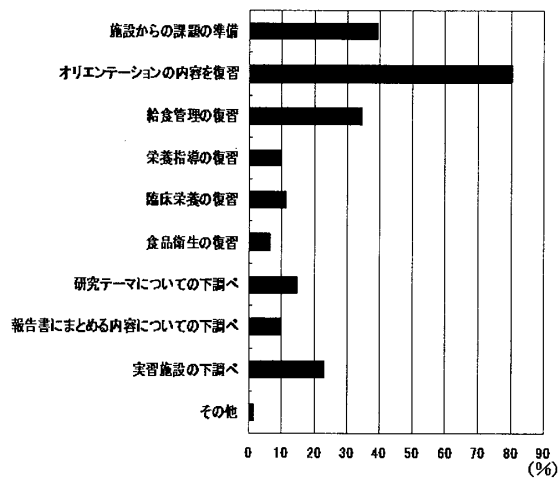
3. 事前学習について

1) 実習前

図9に、事前学習について実習前に質問した結果を示した。事前に「かなり学習した」学生は0.0%であったが、「ある程度学習した」学生が12.6%、「少し学習した」学生が51.6%であった。「まったく学習していない」学生は35.8%であった。事前学習を「ある程度した」「少しした」という学生に、どのようなことを学習したのか質問した結果、「オリエンテーションの内容を復習した」80.3%、「施設からの課題の準備」39.3%、「給食管理の復習」34.4%、「実習施設の下調べ」34.4%、「栄養指導の復習」34.4%、「臨床栄養の復習」34.4%、「食品衛生の復習」34.4%、「研究テーマについての下調べ」34.4%、「報告書にまとめる内容についての下調べ」34.4%、「実習施設の下調べ」34.4%、「その他」34.4%。



事前学習の状況 (n=95)



事前学習の内容 * 複数回答
(n=61: 事前学習を「ある程度した」「少しした」と回答した学生)

図9 事前学習の状況(実習前)

べ」23.0%、「研究テーマについての下調べ」14.8%、「臨床栄養の復習」11.5%、「報告書にまとめる内容についての下調べ」9.8%、「栄養指導の復習」9.8%、「食品衛生の復習」6.6%、「その他」1.6%であった。

2) 実習後

図10には、事前学習をどの程度したのか実習後に質問した結果を示した。「かなり学習した」と答えた学生は5.5%であった。「ある程度学習した」49.5%、「少し学習した」40.7%であり、「まったく学習していない」学生が4.4%であった。

事前学習が不足していたと思うことについて質問したところ (図11)、事前学習で不足していたことが「ある」と答えた学生が31.9%、「少しある」49.5%、「ない」18.7%であった。不足していたことが「ある」「少しある」と答えた学生に、不足していた学習内容を質問した結果を図12に示した。「献立作成」41.9%、「報告書にまとめる内容について」35.1%、「包丁技術」27.0%であった。次いで

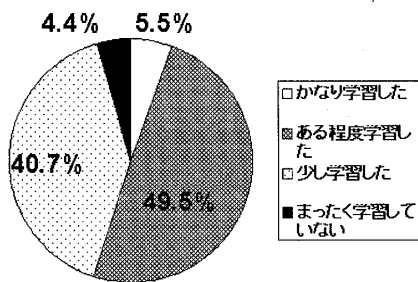


図10 事前学習の状況(実習後)(n=91)

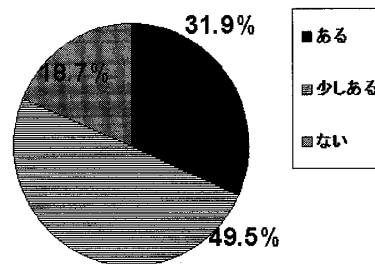


図11 事前学習で不足していたことがあるか(実習後) (n=91)

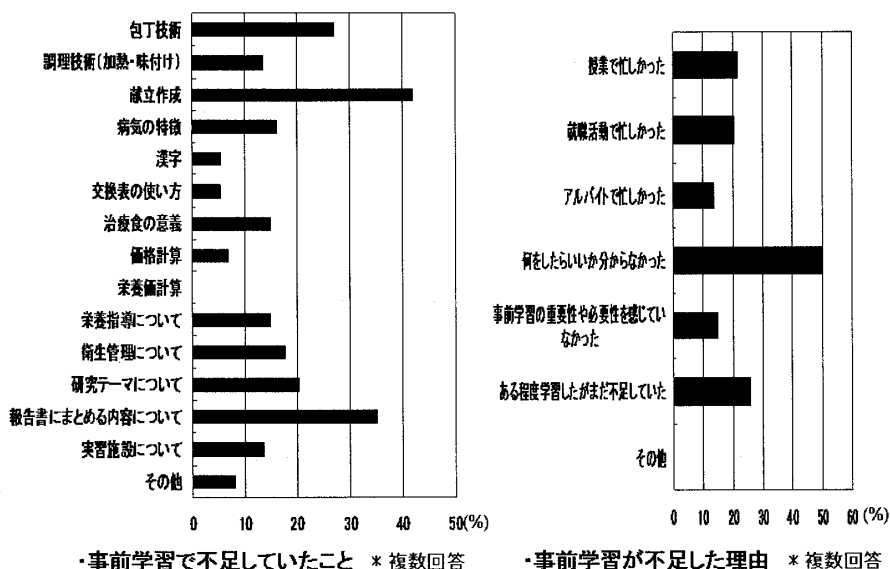


図12 事前学習の不足について
(n=74: 事前学習で不足していたことが「ある」「少しある」と回答した学生)

「研究テーマについて」20.3%、「衛生管理について」17.6%、「病気の特徴」16.2%、「治療食の意義」14.9%、「栄養指導について」14.9%、「実習施設について」13.5%、「調理技術（加熱・味付け）」13.5%、「価格計算」6.8%、「漢字」5.4%、「交換表の使い方」5.4%、「その他」8.1%であった。「栄養価計算」について事前学習が不足していたと答えた学生は0.0%であった。また、事前学習が不足した理由について質問したところ、「何をしたらいいか分からなかった」と答えた学生が最も多く50.0%であった。その他に「ある程度学習したがまだ不足していた」25.7%、「授業で忙しかった」21.6%、「就職活動で忙しかった」20.3%、「事前学習の重要性や必要性を感じていなかった」14.9%、「アルバイトで忙しかった」13.5%であった。

4. 実習への期待

1) 実習前

実習への期待について質問した結果を図13に示した。実習に期待していることが「ある」と答えた学生は22.1%、「少しある」37.9%、「どちらとも言えない」28.4%であった。実習に期待していることが「ない」と答えた学生は11.6%であった。実習に期待していることが「ある」「少しある」と答えた学生に、どのようなことを期待しているか質問したところ、最も多い回答は「栄養士の働く姿を見る」80.7%であった。次いで「調理技術の習得」40.4%、「栄養指導の実際を知る」35.1%、「食事の内容をみる」24.6%、「献立作成能力の向上」19.3%、「班員と親しくなる」3.5%となった。

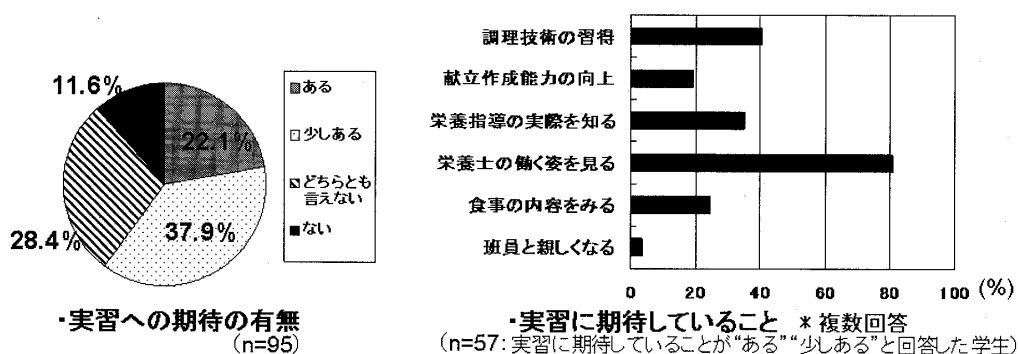


図13 実習への期待(実習前)

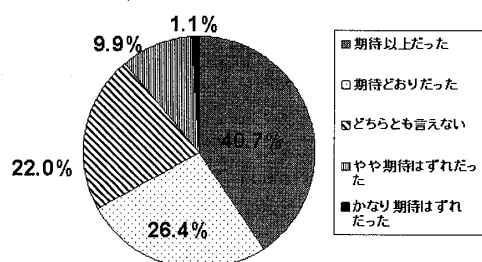


図14 実習への期待と実際(実習後) (n=91)

2) 実習後

実習後に、実習への期待と実際について質問した結果を図14に示した。実習は「期待以上だった」と答えた学生が40.7%、「期待どおりだった」学生が26.4%であった。「どちらとも言えない」学生が22.0%、「やや期待はずれだった」9.9%、「かなり期待はずれだった」1.1%であった。

5. 実習での学習の状況

1) 実習での学習状況

図15に、実習で勉強になったことについての質問の結果を示した。実習で勉強になったことが「ある」と答えた学生は78.0%、「少しある」が20.9%、「どちらとも言えない」0.0%、「ない」1.1%であった。実習で勉強になったことが「ある」「少しある」と答えた学生にどのようなことが勉強になったのかを質問した。最も多い回答が「調理技術」で70.0%、次いで「衛生管理に関すること」55.6%、「コミュニケーションの大切さ」52.2%であった。その他に「献立作成の方法」45.6%、「フードサービスの心得・気配り」43.3%、「時間や期限を守る厳しさ」40.0%、「臨機応変な判断力の必要性」37.8%、「広い知識や視野の必要性」36.7%、「栄養指導の進め方」34.4%、「給食対象者の特徴」23.3%、「事務作業」20.0%、「その他」1.1%であった。

2) 栄養士業務への理解について

図16に、実習を通して栄養士の仕事についてどの程度理解できたのか質問した結果を示した。栄養士の仕事について「かなり理解できた」学生が8.8%、「ある程度理解できた」が72.5%であったが、「あまり理解できなかった」学生が18.7%であった。「まったく理解できなかった」学生は0.0%であった。

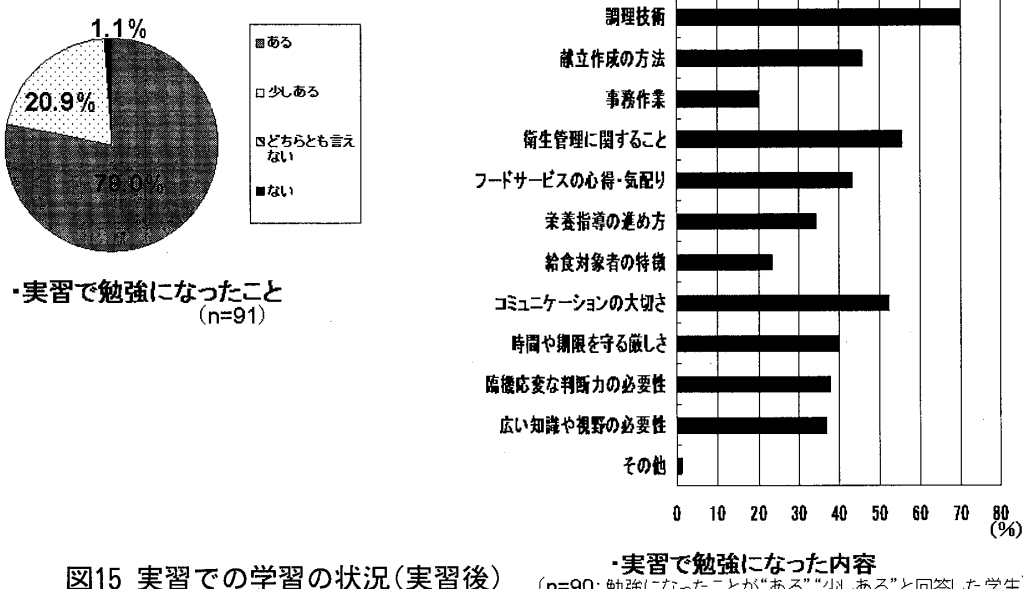


図15 実習での学習の状況(実習後) (n=90: 勉強になったことが「ある」「少しある」と回答した学生)

6. 進路希望および栄養士への意識

1) 卒業後の進路について

卒業後の進路希望について、実習の前年度（1年次）、実習前、および実習後に質問した結果を図17に示した。栄養士を希望する学生は、前年度38.5%、実習前17.9%、実習後26.4%であった。栄養士以外を希望する学生は、前年度10.4%、実習前52.7%、実習後54.9%、進路について迷っている学生は、前年度50.0%、実習前28.4%、実習後16.5%であった。

2) 栄養士への意識

図18に、栄養士として働くことについて実習前後でどのように考えていたのか、実習後の調査において質問した結果を示した。「栄養士として働いてみたい」と思う学生は、実習前27.5%、実習後31.9%であった。「希望職種がダメならやってもいい」学生が、実習前6.6%、実習後17.6%、「遠い将来やってもいい」学生が、実習前24.2%、実習後17.6%、「栄養士就職は絶対したくない」学生が、実習前27.5%、実習後19.8%、「特に何も感じない」学生が、実習前12.1%、実習後8.8%であった。

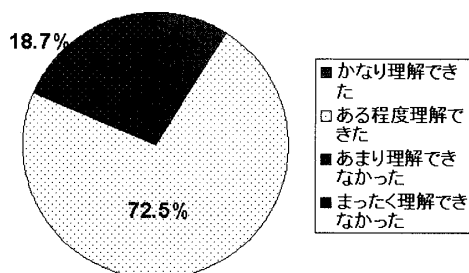


図16 栄養士の仕事についての理解(実習後)
(n=91)

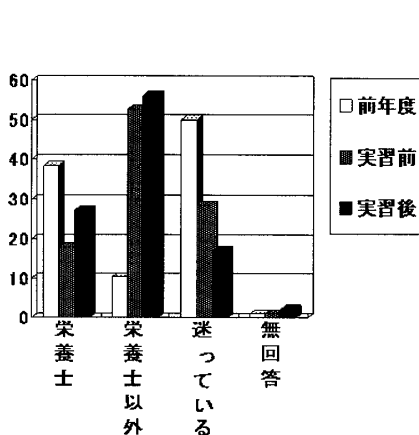


図17 進路希望状況の変化
(前年度・実習前: n=95 実習後: n=91)

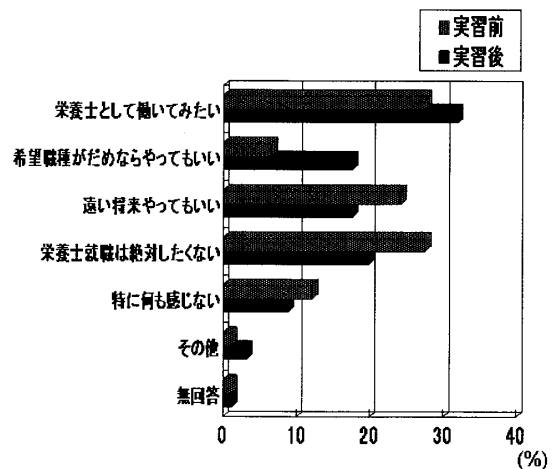


図18 栄養士として働くことへの意識の変化(実習後)

考察

1. 実習前の学生の意識について

1) 実習への不安について (図1)

実に94.7%の学生が実習前に不安を持っていた。未知の場所へ行くにしても多すぎる数字であるように思われる。この原因として考えられることは事前指導の不十分さにあると思う。我が校では現在「校外実習」は「給食管理実習Ⅱ」という名称で独立した科目になり1単位とされている。この科目は「学外実習」と「事前・事後指導」によって形成されている。しかし実際に授業として、時間と場所を組み込んだ形で機能するのは後期からである。この授業においては事後指導の一環として、最後に発表することを前提に、学生自身が「A.研究テーマ」と「B.施設の概要」のまとめ作業をしながらそれぞれ小冊子を作成している。

後期ではその為の授業を1時限組み込んでいるが、前期では授業時間が全くない状態が続いている。そのため事前指導は、春休み中のある日の1時間、どこかの授業の合間、昼休み中等々に行わざる得ない状態となっている。実習に行く施設の種類・事情に合わせた事前指導は絶対に必要である。施設側から前もって出されている課題に対してもそれなりの準備・練習・心構えなどが必要になる。十分とまでは行かなくとも、事前指導のやり方によってはかなりの準備ができるものと思われる。そしてそのことによってかなりの不安部分を軽減できるものと考ええる。

不安の内容についても「何か失敗しそう」「体力的に大変そう」「施設の方に叱られそう」等々、漠然としたものからくる不安が過半数以上を占めている。これらのことも事前に十分な情報を入れ理解してもらうことで、かなりの部分を解消できるものと思われる。

2) 実習内容の把握 (図2)

程度の差はあるものの「実習内容を把握している」と答えたものは74.8%にのぼった。反面、25.3%のまったく把握できていないものがいた。何をもって把握していると判断しているのか。反対に全く把握していないものはなぜそのようなことになるのかを分析してみる必要がある。4人に1人の割合は決して少ない数ではない。事前に内容がもっと把握できるような対策や心構えその他が準備できる対策、例えば体系的でシステマチックなプログラム等を考える必要があると思った。しかしそのためにはまとまった時間と場所の確保が必要となる。

3) 班編成および実習施設への配置について (図3 図7 図4 図8)

実習前の班編成について不安がないものの合計は61.1%となった。校外学習の

表1 校外実習指導の時期と内容

指導時期	指導時間	校外実習指導内容
【1年次】 後期 平成18年度	他の科目の 授業内で実施	校外実習希望調査：実習希望施設、進路希望
【2年次・校外実習前】 平成19年度 前期	90分	第一回全体説明会（オリエンテーション）：実習施設、班編成の発表、実習の心構え、実習の流れを説明、必要な物品の連絡等
	90分	第二回全体説明会：実習日誌および実習報告書のまとめ方についての説明、研究テーマの決定等
	昼休み等	施設別オリエンテーション：学外オリエンテーションの説明、事前学習の内容を確認
	授業公欠	施設別学外オリエンテーション：各施設の実習指導担当者からの説明
	昼休み等	班別オリエンテーション：事前学習の状況を確認（実習ノートの記入）、体調の確認等
【2年次・校外実習後】 後期 平成19年度	昼休み等	班別実習報告：学生からの実習報告、実習施設へのお礼状の下書きを確認
	昼休み等	実習ノートおよび実習報告書を確認：実習終了後2週間以内に学生が提出、必要事項が記入されていることを確認
	毎週金曜日 2時限目	学外実習報告会準備（給食管理実習Ⅱ）：A研究テーマのまとめおよび発表、B実習報告書の作成

班編成は二学年A、Bの二クラスの混合チームが多く、必ずしも親しいものが集まる訳ではない。事前のミーティングでも班員が顔を合わせるのは数回しかなかったはずである。

実習後のアンケートを見ると、この班編成をきっかけに班員同士がさらに親しくなった班が多かった。実習中においては、仲間同士の協力・助け合い・励まし合いが不可欠であったこと、その為のコミュニケーションがよかったことなどが大きな理由となっている。

班について実習前に不安がないものが多かった理由は、班編成を作るときメンバーの選び方にあったものと考えられる。メンバーを選出するにはいくつかの要素があるが、さらに今回はひとつの要素をつけ加えてみた。つまり似た雰囲気

気を持つとこちらが判断したもの同士でなるべく班を構成してみた。従来は他の要素が優先だった為、あまりこの要素に対して目を向けていなかった。今後はこの要素を意識した班編成をも考えるべきだと思った。

実習施設への配置について、実習前の段階で「満足している」が60.0%というのは意外であった。実習施設の種別はいくつかあるが、病院と事業所の占める割合が大きい。さらに「病院は大変そう」というイメージがあるらしく1回目の希望アンケートでは病院希望は少なかった。そのため希望とは異なる病院に配置させられた者がかなりいたように思えたからである。31.6%の「希望とは全く違う」があるいはこれらの集団なのではないかと推察される。8.4%の「ほぼ希望どおりだが不満」の内容については今後さらに調べてみる必要がある。病院を希望してはいたが、行きたいと思っていた病院とは異なっていたということなのかもしれない。

注目すべきは実習後の意識の変化である。

図8の「実習施設は自分に適していたか」という問いの回答結果が大変興味深いと思った。「適していた」と回答したものが77.0%であった。これは実習として「ほぼ満足だったという」別回答のようにも思える。さらに実習を体験することで、実に17.0%の人が「適していた」に変わったと捉えられる。この数字は主に、他の施設希望のものが病院施設に配置され、そこでの体験を通しての気持ちの変容によるものと推察される。また自分が適していると思うのはどのような部分でそう思うのか。施設の方々の対応のどのような部分でよかったのか。施設のカリキュラムが満足できるものだったのか？等々についてもさらに調べる必要がある。

2. 実習後の学生の意識について

1) 実習で大変だったことについて（図5 図6）

「大変だったことがある」と回答したものが96.7%であった。その中身である複数回答の結果について見てみると、大きく分けて二つの種類に分けられる。一つは栄養士の技術的なこと（献立、盛りつけ、包丁の扱い等々）と、もうひとつは社会人としてのマナー（コミュニケーション法、時間厳守、立ち居振る舞い等々）についてである。

さらに図6の「実習前の予想と比べてどのくらい大変だったか」を実習後に聞いた結果では、「大変だったと答えた人」と「大変ではなかった」と答えた人の比率はおおよそ2：1（63.2%：29.9%）であった。「大変さ」と感じる緩和策としては二つのことが考えられる。

①社会人としてのマナーの事前指導、②にがてな技術の集中的な事前指導、である。

これらの事前指導の「心構え」と「技術向上」により、大変さがかなり緩和できるものと考えられる。

3. 事前学習について (図9 図10 図11 図12)

これらの結果から様々なことが読み取れる。

各班には、実習のかなり前に班としての研究テーマを決めることになっている。これは課題があった方が実習内容のポイントがしぼられ、実習をより自分たちのものとしやすくなるのではないかと考えた為である。しかし事前指導の不十分な現状では、これは絵に描いた餅にはかならないことが判明した。施設に対する認識、研究テーマに対する認識、何のための実習かの認識、さらに準備に対する認識、心構えである当事者意識、社会人としての自覚等々、全てにおいて足りないということが改めて浮き彫りになったからである。実習の前の段階では、事前勉強として一体何をしてよいかかわからず、全く学習をしていないものが35.8%もいた。その後、施設別のオリエンテーションによって初めて認識が芽生えるという感じで、その時に手に入れた資料とその関連を調べて事前学習としているものがかなりいた。(80.7%) この段階では「かなり学習した」というものは0%であった。「ある程度」「少し学習した」の割合が合わせて64.2%であった。

その後、学生の事前学習に対する意識が激変するのは、実際に実習が始まってからだと思われた。

半分ほどの施設で初日に課題を出し、最終日にその発表をさせるという形式をとっていた。近年このような施設が増えてきたように思える。学生は課題をこなすために前夜などに必死で学習をするが、すでに事前とはいえない実習真っ盛りのこの段階では、成果を見せるということはなかなか至難の技のようである。(しかし頑張っすばらしい成果を見せた学生が何人かおり、施設側から誉められて帰ってきたものもある。)

実習後に調べた事前学習の結果では、「かなり」から「少し」までとにかく学習していたものは95.7%に達していた。「全くしていないもの」は4.4%にとどまった。その為か学習の不足分について感じた学生は81.4%にのぼっていた。学習不足と感ずる内容には、実際の実習で行われた給食管理(献立作成、包丁技術、衛生管理など)、給食事務(報告書のまとめ方など)、栄養管理(栄養指導、治療食の意義、病気の特徴、交換表など)、研究テーマの順に多かった。

このことから、実際の実習を想定した、より深くよりきめ細かな事前指導・事前練習の必要性を痛切に感じた。

4. 実習への期待・実習での学習状況 (図13 図14 図15 図16)

実習前の「実習への期待」は60.0%であったが、それはそのまま「栄養士を実際に見てみたい」「栄養士を知りたい」「栄養士と接してみたい」ということなのだと思われている。実習先での一番期待していることに「栄養士の働く姿を見る」ということで80.7%にのぼっていた。このことは、高校生および新入生からの事前情報で少な

らず予想していたことであった。つまり食育がまだ小学校で始まっていなかった時代の学生達は、過去に実際の栄養士を見たことも、話したことも、接したこともないという者たちが圧倒的に多いという事実を聞いていたからである。気づいた時は少なからず驚いた。かれらはイメージのないままに栄養士という職業を選ぼうとしているからである。実習先で初めて栄養士・管理栄養士に接するというものが圧倒的に多い。そのため、初めて会った栄養士の存在によって、実際に栄養士になるか否かを決める学生がいても不思議ではないだろう。事実迷っている学生は、行った施設の栄養士の存在・影響によって決めるものも少なくない。その為、養成校としてどのような施設を選ばせて頂くかということも大切な要素となってきた。もちろんこれはお互い様であり、施設側から選ばれることも断れることもあるということである。

今回の実習後のアンケートでは、「期待に応えた実習」と答えたものが70%近くいたが、これは実習として一応の成功をみたと評価してよいのではないと思う。実習先に好意をもった証拠とともとれる。カリキュラムの改訂以降の、施設側の努力の賜ともいえるかもしれない。

実習で勉強になった内容をみると大きく三つに分けることができる。①「給食の運営」として必要な基本技術、②栄養管理として必要な技術、③社会人・仕事人としての必要な技術・心構えである。特にコミュニケーションの大切さについては身に染みて感じてきたようであった。

そして栄養士業務を「理解できた」としたものは90.1%にのぼった。どの部分の何が理解できたのかについては、今後さらに調べていく必要があるが、少なくとも栄養士のイメージは90%以上のものが持てたものと理解している。

5. 進路状況および栄養士への意識について (図17 図18)

「実習」つまり「実地に学習する」ということは、それだけの力とエネルギーを保有していることだと感じた。校外実習を経験した後に栄養士になりたいというものが増えている。反対に絶対に栄養士にはなりたくないと言っていたものが、実習後は減っていた。これは実習によって栄養士への認識が深まった結果であろうと思われる。

イメージさえ定かでなかったものが、仕事の内容を含めて好感が持てるものになったのであろう。1年次に栄養士になりたい者が2年次の実習前には激減してしまう。

これは、初めに抱いた志である「栄養士になりたい」という気持ちが、次第に毎日の地道な学習の中で萎えて、自信を失っていくことの結果であると思われる。実習先ではその志が再び燃えあがったり、無くしていた自信を取り戻すことが出来ているのかも知れない。

それならば、もっと早い段階で栄養士についての認識を深めれば動機を高めることにつながるだろう。その為には、1年次の早い段階で栄養士の活躍する映像（ビデオ・DVD）を見せたり、実際の栄養士の方々の話を聞く機会を増やしたりすることも有効かと思われる。

まとめ

平成18年度の、淑徳短大栄養学科の就職率97.6%のうち栄養士として就職したものは42.0%にのぼる。(社)全国栄養士養成施設協会「就職実態調査」(平成15年度)によれば栄養士養成課程の短期大学の平均が38.0%である。わが校は若干上回っている。できることならば今後この数値をさらに上げて行きたいと思う。たった2年間の養成期間ではあるが、青雲の志で始めた学生生活を最後まで続けるためには、途中で数々の仕掛けを作ることが必要になってくる。その重要なものの一つに校外実習があると思う。昔のように、単位の為だけにその期間中を依頼する側される側が互いに我慢しあう、というような雰囲気は、今はあまりない。施設側の校外実習の捉え方も、「新しい風」「仕事の確認・見直し」「栄養士存在のアピール」「他部門との連携」等のように、積極的に活用しようという姿勢を感じる。さらに本筋である「後進としての栄養士を育てる」ということについても真剣に考えていくくださる方々が増えているのを感じる。優秀な栄養士を育てることは、栄養士の世界の未来を拡げることにつながる。それを栄養士自身が痛切に感じるようになってきているのだと思う。栄養士の未来を考える時、優秀な栄養士を育てることは、養成校だけでとても出来るきることではない。すぐれた校外実習施設の存在が不可欠になってくる。一つの施設に対して、実習の前後4回ほどの訪問を心がけている。実習を通しての交流が貴重な情報交換の場になっているためである。何う度に様々な生きた情報に触れることができる。また、実習施設から事前指導の要望が出ることもあれば、逆に指導内容についての希望を聞かれることもある。実習に対する養成校としてのこちらの姿勢も、かなり主体的なものが必要となってきた。学生に対する充実した実習を遂行するためには、実習施設との連携は今後さらに必要なものになることと思う。その為にもやはり1週間というのはいかにも短すぎる。最低でも2週間は必要だろう。学生への聞き取りでも「自分は1週間でよいが」「後輩には2週間は必要」という本音とともれる意見がかなりあった。1週間では施設に慣れるだけで終わってしまい、それからの本当の実習ができないというのである。当の実習先から、近頃は「2週間ならば実習をお受けする」という旨のことを言われることさえある。他の部門の様々な実習期間と比べてみても栄養士の1週間はいかにも短すぎるように感じる。近頃は自主的に期間を延ばしている養成施設も増えているようなので、実習期間延長の検討も必要かと思う。しかし、厚労省、文科省からの通達である、「15回授業の実施」を考えると全員の2週間実習は今のところ不可能な気がしている。それでも実習が1週間であるならば、せめてその前に行う事前指導を充実させることでそれを補うことは十分に可能なことであると考え。事前指導を充実させることにより、たった1週間でももっと生きた実習にすることこそ、現在できる最善の方法であるだろう。その為にも、何とか事前指導の授業確保の道を模索する必要があると感じている。学外・学内実習を充実させることは、

養成施設の教育そのものを充実させることになると思えるからである。

参考文献

- 1) 『栄養士法』平成12年4月7日改正 法律第38号
- 2) 『管理栄養士・栄養士養成施設カリキュラム等に関する検討会報告書』平成13年2月5日 厚生労働省
- 3) 井上浩一「栄養士制度改正に向けた施策の基本的考え方：課題解決のための施策の方向性をまとめた栄養士制度検討会報告より」『栄養日本』Vol.50(9), 2007, p.7-16.
- 4) 『管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習要項』平成14年4月1日 文部科学省・厚生労働省通知
- 5) 日本栄養士会, 全国栄養士養成施設協会編『臨地・校外実習の実際：改正栄養士法の施行にあたって』平成14年10月
- 6) 辻ひろみ「栄養士養成における「校外実習」のあり方について：学外実習の現状と問題点」『小田原女子短期大学紀要』Vol.34, 2004, p.27-39.